

#### シンポジウム 4 「胃癌撲滅を達成する胃癌検診体制のこれから」

### Gastric cancer screening program toward the extermination of gastric cancer

司会 後藤田卓志（日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野）  
鈴木 秀和（慶應義塾大学医学部医学教育統轄センター・  
専修医研修センター）

1960年代半ばから始まった胃X線検査による胃がん検診は、死亡率減少効果に対して世界的にも画期的な医療政策であった。しかし、近年では胃X線検診受診率は減少の一途と辿り、胃癌による死亡数は数年前まで約5万人を下らない状況であった。一昨年より、胃内視鏡検診導入され（50歳に開始年齢を引き上げ、2年ごとという体制）急速に普及している。一方で、慢性胃炎に対するピロリ除菌治療の保険適応にあたって内視鏡検査が義務づけられたことで実質的には胃内視鏡検診が2013年から始まっているとも言える。また、ピロリ感染率の急速な低下を考慮すると費用対効果の面からは死亡率減少効果を目的とした二次健診ではなく、原因治療を包括した一次検診としてより早期のピロリ菌検診・除菌が新たなオプションとなり得る状況でもある。胃癌死亡数が減少してきている現況は、様々な要因が影響していると考えられるが疫学的にはどのような将来像が考えられるのか、その上で日本から胃癌を殲滅するために、どういった胃癌検診を実施していくべきか、様々な観点からの演題を募集したい。